

「経営学」のオンライン授業化について

山下悠 Yu Yamashita
滋賀大学 経済学部 / 准教授

本稿では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大を防止するため、私が担当した専門科目「経営学」の授業をオンライン化した経緯について記していきます。

1. 専門科目「経営学」とは

「経営学」は専門教育科目群の学部専門共通科目に該当し、経済学部内で開講される経営学に関係する科目の講義を受講していくための基礎的な知識を修得することを目的としています。企業経営や経営学の全体像について把握した上で、経営戦略、経営組織、社会的制度などの様々なテーマを取り上げて、基礎的な概念とそれをを用いる理論について、具体的な現実の事例を踏まえながら学んでいく科目になります。特に、経営学の領域に含まれる、経営管理論や経営戦略論などの理論と理論の相互関連性を理解することを重視しています。

2018年度からは春学期は2科目、秋学期に1科目開講しています。担当する教員が異なることが多いですが、3科目ともに教科書として『1からの経営学(第2版)』(加護野忠男, 吉村典久編著)を使用することで、授業で取り扱う内容は同一のものになるようにしております。2科目開講する春学期については、成績評価の基準および期末試験を共通化しているため、履修する学生は必修科目(外国語科目や体育科目)の開講時限やサークル、アルバイトなどの予定を考慮に入れて、履修する授業を選びます。

2. オンライン型授業とは

授業をオンラインで行うことは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大を防止するために認められるようになったわけではありません。大学設置基準の第25条第2項では、「大学は、文部科学大臣が別に定めるところにより、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等

以外の場所で履修させることができる」と定められていました。

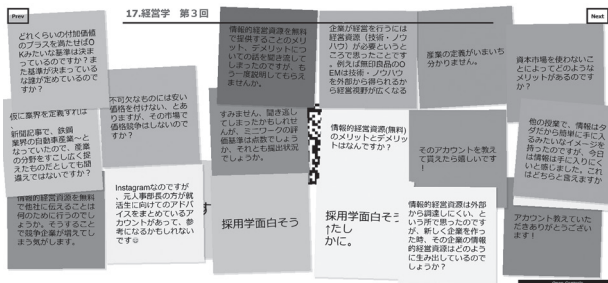
2020年度春学期の授業を始めるにあたって、文部科学省から令和2年3月24日に公表された「令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)」や、令和2年4月1日に公表された「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ&A等の送付について」などにおいて繰り返し指摘されたことは、「従来の対面型授業の教育効果と同等の教育効果があれば、大学を卒業するための単位として認められる」という点でした。教育効果が重要視されたわけです。教育効果があると認められるために必要な要素については、平成13年文部科学省告示第51号の第1号および第2号において示されており、毎回の授業の実施に当たって、(1)設問解答、添削指導、質疑応答による十分な指導を併せ行う、(2)当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されている、の2点が必要であるとされていました。

3. 授業方式の決定

オンライン授業は、大きく分けて2つの授業方式があります。Zoomなどの会議ツールを用いて、同時かつ双方向に映像や音声をやり取りすることでリアルタイムに授業を行う「同時双方向型」と、LMS(Learning Management System)を用いて授業の資料を、YouTubeなどによって映像を、それぞれ提供する「オンデマンド型」です。

同時双方向型の授業は従来の対面型授業に近い方式であるため、学生が教員に対して質問をすることができれば対面型授業と同じ教育効果があるとされています。オンデマンド型の授業の場合には、上で述べた2点両方を満たすとともに、指導は学期末などにまとめて実施するのではなく、毎回の授業の実施に併せて行うことが必要であるとされていました。

2020年度春学期の経営学は、澤木聖子教授が水



曜日2限に、私が木曜日2限に担当することが決まっておりました。どちらの授業方式で授業を実施するのか、そして、どのようなツールを用いて授業を実施するのかについてかなり多くの議論を行いました。同時双方向型に合うものとしてはZoomやMicrosoft Teamsなどの会議ツールが、オンデマンド型に合うものとしては授業の動画を撮影してYouTubeに掲載する、PowerPointのスライドに音声を加える、など様々なツールがありますが、議論の結果、同時双方向型とオンデマンド型を併用する形で授業を行いました。

具体的に述べると、(1) 澤木教授はZoomを用いて、私はYouTube Liveを用いて、同時双方向型の授業を実施しました。加えて、YouTube Liveでライブ配信を行うと配信終了後に自動で録画映像がYouTubeに保存されることを活用し、(2) 録画された私の授業映像のURLを双方の授業の履修生に送付することによって、オンデマンド型の授業も実施しました。なお、YouTube LiveのURLと録画された映像のURLは同じであるため、ライブ配信中にURLをクリックすればライブ配信に参加することができ、ライブ配信後にURLをクリックすれば録画された映像を閲覧することができます。こうすることによって、授業を履修した学生は、ライブ配信の授業に参加するか、録画映像を閲覧して勉強するかを選択することができるようになりました。

2019年度までの経営学の授業では成績評価を期末試験のみで行うことが通常でした。しかし、上に述べたように、設問解答、添削指導、質疑応答等による指導は、毎回の授業に併せて実施することが必要になったため、この授業では毎回の授業内容に関する正誤問題をSULMS (Shiga University Learning Management System) で実施するとともに、中間レポート2回および期末レポートで成績評価を行いました。成績評価の方法を変更したため、期末試験のみで成績評価を行った際の学習効果と比較することは

困難ですが、総じて良い成績であったと感じています。学生が意見を交換する機会を確保するための方法として、SULMSのフォーラム機能を活用して学生それぞれがコメントや質問などを投稿できるようにしましたが、あまり活用されませんでした。その理由として考えられるのは、フォーラム機能に投稿した内容を他の学生が閲覧することができるようになってきている点です。どんな質問を、誰がしたのかを他の学生に見られることに拒否反応を示すのは、従来の対面型授業でも同じでした。

そのため、私の授業では株式会社いるあわせが企画・販売している「つぶやきふせん」というツールを使いました。「つぶやきふせん」は、スマートフォンあるいはパソコンのブラウザから意見や質問を気軽に発信できるツールです。発信されたコメントが「ふせん」のように画面に貼られることで、どんなコメントが届いたのかをすぐに確認することができるとともに、その画面を学生に共有することで、周囲の学生がどんなことを考えているのかを共有することができます。挙手せず匿名で自分の感想や分からなかったことを言えるため、基本的な確認から細かい用語の定義などの質問を発信できました。今回の授業ではライブ配信中使用し、意見や質問を授業中に発信してもらい、授業終了時または次回の授業で補足説明を行う形で使用しました。

4. おわりに

このエッセイを執筆している2020年11月下旬の段階では、2021年度春学期の授業を2019年度までに実施してきた対面型授業に戻ることができるのか、オンライン授業を継続するのかが分かっていません。しかし、どちらの授業形式であっても、学習意欲が高い学生だけでなく、学習意欲が低い学生でも基礎的な内容についてきっちりと理解できるような仕組み作りを心掛けて参りたいと思います。